

前橋文学館報

前橋文学館報 第44号

2018



萩原朔太郎生誕一三〇年記念特別企画展

「パノラマ・ジオラマ・グロテスク——江戸川乱歩と萩原朔太郎」記念イベント2

対談 「猟奇な二人の病気な話」

平井憲太郎 × 萩原朔美

進行 安智史 手品解説 栗原飛宇馬

〈手品解説・実演〉

乱歩の手品道具からわかること

栗原飛宇馬 ただいまご紹介にあずかりました栗原飛宇馬と申

します。主に萩原朔太郎研究をしておりますが、それが高じて、朔太郎の趣味だったマジックについていろいろ調べていくうちに、自分もマジックをするようになり、すっかりマジック大好き人間になりました、いろんなところでマジックを見せたりするようになってしまいました。今日はこういう場をいただきまして、たいへん光栄に思っております。今回、乱歩邸にも伺って、乱歩の遺品の手品道具とこののを調べさせていただきましたんですが、とても興味深いことがわかってきました。せっかく二人の貴重な対談を楽しむにお集まりいただいたみなさんには、ちょっとだけ退屈な芸にお付き合いいただければと思います。

乱歩と朔太郎の手品をめぐるお話させていただいたのですが、最初に乱歩邸に伺った時、「手品の種」という乱歩の自筆で書かれた箱が残っていて、その箱の中にごちゃごちゃといろんな道具が入っていました。何に使うかわからない道具がたくさんあったんです。ただ、江戸川乱歩という人は、なんでも保管しているたいへん几帳面な方で、遺品の中にカタログが残っていました、そこにたくさんさんの書き込みがしてありました。どうやら昭和十一年に、別府にあった正穂奇術研究所というところでこのカタログを入手して、自分が購入するマジック道具に印をつけて、全部でいくらか計算したりしている。そういう細かい書き込みまで残っていたおかげで、こういうものを購入したかがわかったんですね。

それから、カタログの一部に「面白い奇術の教授」と書いてあるところがあります。マジックの道具を販売するだけではなく、どうもこの研究所では、手品を覚えない人に

レクチャーをしていたようです。そのレクチャーの演目が「面白い奇術の教授」と題して載っているんですね。で、乱歩もそのレクチャーを受けているんです。なぜそれがわかるかと言いますと、乱歩は演目に印を付けただけではなく、「奇術の種類」と題したメモを、原稿用紙ぐらいの大きな紙に残しており、そこに書いてあるメモの内容と、カタログのレクチャーの演目が一致するんです。「昭和十一年一月十日」「正穂奇術研究所ニテ」と書いてありますので、九州旅行に行った時に、乱歩はわざわざ旅行先で、かなりのお金を払ってたくさんさんのマジックを教わったことがわかります。この昭和十一年という記載が、非常に重要なんです。

朔太郎はこの年の夏、乱歩に手紙を送っているんですね。昭和十一年の七月に「先日御手紙いたゞいてから、すぐ御伺ひして手品拝見したく、楽しみに思つて居たのですが」という手紙を書いているんです。おそらく乱歩は朔太郎に、この昭和十一年一月に別府で手に入れたマジック道具を見せたくて手紙を送った。その返信がこの手紙で、今、二階の展示会の会場に展示してあります。「奇術の種類」と書かれた箱に残っていた乱歩のマジック道具というのは、ほとんどこの昭和十一年のもののようなのです。この道具を朔太郎も乱歩から見せられたのではないか。確たる証拠はありません。

せんが、二人の交流の証しとなる品物ということで、この道具も会場に展示してあります。

そして、これは今日初公開のお話なんですけれども、この手品道具のカタログのメモをよく見ていくと、とてもおもしろいことがわかります。レクチャーの演目のところに「トランプ奇術」という項目が二つあります。十八番目の「トランプ奇術」というところに、「高等テクニク基本動作」というふうに書いてありまして、「パスス」とか「フオース」とか「ミリオーン」とか「チエンヂ」とか、いろいろ書いてあるんですけども、これは全て、現在でもプロのマジシャンが使っている技法なんです。ところが、そういう高等テクニクを教えますよ、というところに乱歩は印をつけていないんです。練習が必要なそういうテクニクには興味がなかったのかなと思います。

その一方で、十九番めの「トランプ奇術」の方には、「左のカード技術は御客のトランプにて練習無しですぐ演れます」とあります。簡単な手品を教えるって書いてある。ここに、乱歩はたくさん丸をつけているんですね。ほとんど全部教わったんじゃないかというくらい印があります。だから、当時の乱歩はテクニクにはあまり興味がなかったと考えられます。これに対し、朔太郎はこのテクニクの方

をずいぶんと練習しているんです。今日はその、練習をしていた「フオース」というのをお目にかけたいと思います。

朔太郎が好んだ手品

栗原 朔太郎の手品道具というのはほとんど残っていません、トランプだけが残っているんです。今日私が持ってきたのは、朔太郎の持っていたトランプと同じものです。このトランプは、マジックの好きな者にはおなじみのものですよ。今でもプロのマジシャンが使っている「BICYCLE」の「Bee」というトランプを朔太郎は持っていました。よく戦前に入手していたなあと思うんですけれども、「BICYCLE」の方は特に、今でも全く同じデザインのままです。販売会社のホームページでは、世界中のマジシャンが愛用するトランプだと謳っています。これだけでも、朔太郎は相当マジックに凝っていたとわかるんですね。ちよつと実際にやってみたいと思います。

*手品実演

こちらは普通の仕掛けのないトランプなんですけれども。それではですね、申し訳ないですけども、一番前の方、お手伝いいただければと思います。

カードをはじいていくので、お好きところで「ストップ」とおっしゃっていただけますか。

観客 ストップ。

栗原 よろしいですか。替えてもいいですよ。いいですか。それではこのカードをまだ見ないで持っていていただけますか。このトランプは今引いていただいたんですけれども、実は前もって予言しておきました。皆さんがをお持ちの、配布資料のイラストにこう、何気なくさりげなく、トランプが一枚載っていますよね。それでは、引いたカードが何だったか、遠くで見えないお客様もいるので、マイクに向かっておっしゃっていただけますか。

観客 「クラブの9」

栗原 「クラブの9」ということでございます。配布資料のイラストと同じですね。前もって予言させていただきました。（場内拍手）

これはどういうことかと言いますと、マジックには、お客様が選んでいるようで、実はマジシャンが思い通りのカードを引かせているという、そういう技術があるんです。それを「フオース」と言うんですね。これは今でも使われていて、秘密裏に行われている技術なんですが、朔太郎はこれを娘の葉子さん相手に何度も練習していたという話が

残っています。

***手品実演**

ではもう一度、今度は広げたカードの中から、深く考えずに一枚取っていただいでいいでしょうか。引いたカードは何でしたか？

観客 「スペードの10」

栗原 そこは「クラブの9」であつてほしかったんですが、失敗してしまいましたね。こういう場合はですね、ちよつとカードを振つてあげると、このように「クラブの9」に変わつてしまふんです。（拍手）

私なんかだとフォースが成功しないこともあるんですけど、そんな場合でも指先のテクニックを磨いていると、今のようにカードを変化させたり、いろんな技が繰り出せます。朔太郎がフォース以外にどんなテクニックを持っていたか、定かではありませんが、少なくともテクニックを要するマジックを練習していたことは確かなんですね。

乱歩が好んだ手品

栗原 じゃあ乱歩の方はどうかと言いますと、乱歩の手品道具の中にあるトランプは、テクニックが不要な、仕掛けのあ

るトランプなんです。今日はそれと全く同じではないのですが、類似のトランプを持つてきました。

***手品実演**

こちらのトランプ、全部バラバラのカードです。では、一枚ずつカードを落としていきますので、お客様が大好きなところでストップと言つてください。

観客 ストップ。

栗原 では、この一番上のカードを、そつと見ていただいでいいでしょうか。はい、大きな声でそのカードが何か言つていただけますか。

観客 「クローバーの9です。」

栗原 ありがとうございます。（拍手）

これは実は、今でもデイズニールランドなんかで売っている仕掛けのあるトランプなんです。だから労せずしてクローバーの9が出てきます。そうですね、ではこちらのお客様、好きなどころでカードの束を持ち上げていただけますか。今引いたカードはどうでしょう？

観客 「言っちゃつていいんですか。ハートの3です。」

栗原 あれ、これは違いますか。すいません、失敗しちゃいましたね（笑）。でも、実はこのトランプはテクニックなしでクローバーの9が選べるようになっていきます。見ていた

だくとわかるんですが、さつきまでバラバラだったカードが、このように全部クロバーの9になっています。クロバーの9しか出てこないようにできる、そういう仕掛けのあるトランプなんです。

これと全く同じではないのですが、似たような仕掛けのあるトランプを乱歩は持っていました。「新作トランプ奇術」と箱に書いてあるトランプがそうです。乱歩がどれくらいこれらの道具を使っていたか、はつきりしないところがあるんですが、朔太郎に比べると仕掛けのある道具をいっぱい持っていた。探偵小説のトリックにも使っていたことを考えると当然かなと思うんですけども。同じマジックに凝っていたとしても、朔太郎と乱歩では、ちょっと傾向の違いがある。指先のテクニクをマスターしようとする朔太郎と、仕掛けやトリックを収集する乱歩。残された道具から、そんな傾向がわかるんです。

他にもいろんな話がありまして、朔太郎は失敗した話がいっぱい残っています。私もさつき失敗しましたけれども、ご愛嬌ということで（笑）。朔太郎は酔っ払うと手品を始めるけれども、すぐにタネがばれてしまうという話がたくさん残っていますね。みんなが白けちゃうんですけれども、本人は一所懸命やっているという話です。

乱歩が具体的にどんな手品をやったかというのはわからないんですが、いくつか証言があります。高木重朗という、高名なマジックの研究家がいるのですが、乱歩はこの高木さんを夜中に電話で呼び出して、奇術を見せながら銀座や新宿のクラブを廻ったことがたびたびあったそうです（高木重朗「乱歩先生と心霊現象」 講談社版『江戸川乱歩全集』第十七巻「月報九」、一九七九年三月）。ここでは高木さんに演技させたとと思われるのですが、新年会では自分で奇術を演じたり、奇術大会に出演したこともあったと書かれています。また、石川雅章という風俗研究家の方が紹介している逸話には「興至ればご自分でも舞台上立って簡単なものの二つや三つは披露された」（石川雅章「奇術を愛した文豪の死」『奇術研究』第十巻第三号、一九六五年十二月）とあります。もしも乱歩がすぐ難しいマジックを練習していたんだとしたら、わかる人は必ずそう証言していると思うんですね。わざわざ「簡単なもの」と書かれているのは、やはり失敗のないものをやっていたんじゃないかと思うんです。これはマジシャンとしてはとても大事なことで、難しいマジックを見せて失敗してしまうよりも、ちゃんとお客さんのことを考えたら、簡単なものでも失敗しない方が絶対不思議に見えていいんですね。朔太郎とは

対照的に、そういう配慮を、乱歩はすごくしていたんじゃないかなと思います。

それぞれの楽しみ方、遊びへの熱意

そして今日の対談にもつながっていくんですが、今日お話しただく、お孫さんの平井憲太郎先生のお話です。憲太郎さんがかわいい盛りだった小さい時のことですね。「祖父はよく私を引っ張り出しては人前で手品をやらせた。そのうち何回かは祖父が隠し芸として手品を披露し、そのあと私がやるという形だった」（平井憲太郎「祖父（乱歩）の想い出」 講談社版『江戸川乱歩全集』第二十二巻「月報二十五」、一九七九年十一月）と書いていらっしやいます。こんなふうに、お孫さんに簡単なマジックをやるように指図して、それで宴会を盛り上げていたというエピソードがあるんですが、朔太郎だったらどうなんでしょう。今日はお孫さんの朔美館長にもお話いただきましたけれども、もしも朔太郎が長生きしていたら、朔美館長にマジックをさせていたのか、それとも自分だけがやっていたのか。どっちなのかなと思います。

乱歩はお孫さんにマジックをさせて場を盛り上げてい

た。何か、人に配慮してその場を盛り上げていたんじゃないかなと思います。どちらも二人それぞれに手品を楽しんでいたとは思いますが、そういう違いもあるなあということが、こういった手品道具からわかってくるんですね。今日は、ちよつとそんなことをお話させていただきました。

それから、朔太郎は手品のことをこんなふうに書いてるんですね。

詩人はその文学の上で、お洒落をしたり、ユーモアを弄したり、手品をして見せたりすることへの熱意——遊びへの熱意——を持たねばならぬ。

萩原朔太郎「遊びへの熱意」（『港にて』一九四〇年七月）

詩人がみんな手品をやったらいへんだと思うんですけども、文学の上で手品をするというのは、ちよつと意味が深いなと思うんです。朔太郎にとっては単なる趣味じゃなかった部分もたぶんにあるんじゃないかなと。というわけで、孫のお二人にとって遊びというものがいったいどういう意味を持つのかということも、私の個人的な興味とし

ではぜひ聞かせていただきたいなと思っております。これから、二人のお孫さんのお話を伺うのを、本当に楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

それではこれで、私の話を終わります。ありがとうございます。

〈対談〉

展覧会について

安智史 今日皆さん、お忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。今回の展覧会の企画監修を務めた、愛知大学短期大学部教授の安と申します。本日は、館長のご指名で進行役をさせていただきます。平井憲太郎先生と朔美術館長の孫×孫対談ということで、たいへん楽しみにしてきました。

初めは、まずお二人に今開催している展覧会の感想や、栗原さんのマジックを見てのご感想などを伺いまして、それから今日は、皆様にお配りしました二人の交流に関する資料などもありますので、これを読みながら、ご感想などを伺えればと思います。

今日の対談のタイトルが「猟奇な二人の病気な話」ということで、これは朔美術館長が付けたんですけれども、病気といっても別に持病がどうかの話ではなくて、「病膏盲^{やまがこうもう}に入る」ほどのお話だと思います。お二人それぞれ、朔太郎の孫、江戸川乱歩の孫というだけではなくて、たいへんおもしろい、普通ではない履歴を持つていらつしやるので、そういうところについてもお話が伺えればなあと思っています。まず、館長、いかがですか。

萩原朔美 今回のタイトルですが、「ぐろくて、かわいい！」をタイトルにしたいと言ったら、学芸員に反対されてましてね。だけど、「ぐろくて、かわいい！」と「変態だていいじゃない。」をどうしても入れたかったんで、強引にキャッチコピーにしました。「変態だていいじゃない。」というのは、いまMCをやっている学芸員のお嬢さんが中学生なんですけれど、意見を聞かれたときに言った言葉だということだったので、それを採用させていただきました。

それから展示の内容に関しては、まあグロテスクではないなど。もつとグロテスクな展示になっていいんじゃないかなというのが、個人的な感想ですね。江戸川乱歩が、「芸術は常にあらゆるタブーの水底をこそ航海する」（『残虐への郷愁』「新青年」一九三六年九月、春陽堂版『江戸川乱歩全

集『第三巻』と言っているんですけども、やっぱり芸術がタブーに挑戦しなければ誰が挑戦するんだ、というふうに思うんですね。当然のことながら芸術の歴史は政治よりも経済よりもはるかに古い。だからあらゆるジャンルに対して芸術が先輩面をして物を申すのは当然の話だと思っているんで、じゃあ政治がグロテスクをやるかって言ったらやらないので、芸術がやるべきだと個人的には思っています。

従来の文学館の展示というのは、ガラスケースに入った死んだ人の原稿を眺めるのが主なんですけれども、何だかどこの文学館に行っても展示が常に同じに見えるんですよ。そこがぼくはすごくいやで、展示する方法がすでに内容を表しているというのがいいと思ったんです。それがなかなかできないんですけれどね。

今回、「鏡地獄」のような鏡の部屋を作ろうと思ったんですが、考えていた場所が消防法でダメと言われまして、じゃあエレベーターの中を全部鏡にしようかと言ったら、それも予算的になかなか難しく、それで覗き部屋を作ろうと思ったんです。お客さんが展示を見ているのを屋根裏から覗くという仕掛けも考えたけど、それも物理的に無理で、アイデアの大半ができなかったですね。やっぱり乱歩は覗きですよ。展示会場を覗くだけというのでもいいんじゃない

ないかということになって、ごく一部だけやりました。やっぱり公共の、いろんなお客さんがいらつしやる場所に仕掛けをするって本当に難しいことだと思います。

さつき控室で、十八禁とか、小学生中学生は入ってはダメという企画があってもいいんじゃないかと平井さんがおっしゃって、ああそれやれば良かったと思いましたね。一部は全員、二部はすみませんが高校生以下の方はご遠慮ください、という展示。二部構成にすべきでしたね、それいま反省しています。平井さんは、いかがですか。

平井憲太郎 どうも危ない提案をしてしまったようですが、今

日が最終日なので、批判されることはきつくないだろうと思いますが。残念だったかどうかわかりませんが。今日はお招きいただき、ありがとうございます。

「獵奇な二人の病気な話」というタイトルですけれども、確かにそう言われてみればそ



うなのかもしれないですね。私自身も全うな会社に勤めるということは一回もしたことがないんです。高校生時代からアルバイトで雑誌の出版社に行き始めまして、それがそのまま生業になってしまいました。とうとう全うなサラリーマンは一回もやったことがないまま今に至っています。仕事がうまく行ったかどうかというのは、何とも申し上げようがないですけども、そういう意味ではやりたいことをやらせてもらっているのかな、ということをおもっています。ただご承知の通り、作家という商売は跡を継げるものじゃございませんし、親の七光りがあっても文章がどうしてもくなければどうしようもないです。役者ほどには七光りが効かない商売ですから、文筆で食うのは完全に諦めまして、私は雑誌の編集をやっていました。隙間を埋めるのは早くて、十行や二十行空いたのを埋めるのはうまいです。そういうことなら任せてもらいたいんですが、百枚書け、二百枚書けというのは、ほとんど不可能だと思います。

「パノラマ・ジオラマ・グロテスク」という展覧会のタイトルですが、これはたぶん、朔太郎さんとうちの祖父と両方に共通した世界観の持ち方というか、物事の表現の仕方を表していたんだらうなと思います。祖父の文章は大半が比較的読みやすいので、読んでいただくと風景

が目の前にチラチラ広がるような、そういう文章が多いのかなと思うんです。私は文章力は全くないんですが、とりあえず立体ジオラマは作ったことがあります。いまいちセンズが良くなって、周りの人に比べると見劣りがして、最近ちよつといや気がさしているんですけれども。どうもそういう能力にいささか欠けているようで、唯一祖父から受け継いだのが、さつき言った隙間を埋めるという整理能力の高さでしょうか。隙間が空いていると落ち着かないんです。

(場内笑)

乱歩から受け継いだ整理癖

平井

さつき館長さんから、寺山修司さんの蔵書の整理が病的にすばらしいというお話を伺いました。本棚の中は高さの揃った本しか並べていないという、本末転倒の整理をなさっていたという話を聞いたんですが、私もいささかそれに類したところがありまして、本棚の本の高さが揃っていないと何だか気分が悪い。それで本の冊数がすごく増えたという、(場内笑) そういう本末転倒な人間でございまして、けれども、それで良かったらお付き合いいただければと思っております。

萩原 寺山さんの整理癖というのはすごいですよ。あの机のきれいさって言ったら。ピカピカに磨いている状態じゃないと原稿書かないんですもん。

この前乱歩邸に伺ったら、これが本当にすごいですよ。さつき手品の箱の話が出ましたけれども、本の入っている箱が、蔵の天井までびつしりと細かく重なって整理されているんです。それで、その箱に何が入っているか手書きで全部書いてある。自分の原稿とか持ち物とか、普通はあんなに整理なんてしません。あれはちよつと感動しましたね。一生かかってあんなことやつたのかと。ああいう癖がやっぱり遺伝していますか。

平井 若い頃からだったんですが、だんだん病気が重くなっていますね。

祖父の場合は、締め切りに追われるじゃないですか。ぼくなんかも経験あるんですけども、締め切りに追われていると、ああいう仕事ってほかどるんですよ。試験勉強の前に何かしたいとか、受験の前に何かしたいとかいうのと同じで、締め切りに追われたとき、ああいうことは逃避先として最高なんですね。家族から見ても仕事しているように見えますし。今になってみると逃げ道だったのかなと思わないこともないですね。

萩原 この前、覗きを研究している人の本を読んでいたら、覗きっていうのは、整理癖のアリユージョンなんですよ。だから乱歩は明らかですよ（笑）。

平井 ぼくも危ないですね。

乱歩のサービス精神

平井 さつき手品の話があつて、うちの祖父が非常にサービス精神旺盛だったとご評価をいただいたんですけれども、まあそれは事実だと思います。家はご承知の通り池袋にあるんですけれども、写真がたくさん残っていて、私も小さい頃で、いくつかは記憶に残っております。祖父は大勢の人を呼んでパーティをやるのが好きだったんですね。晩年になんか体が衰えてからも、あえてそういう会を主宰してやりたがっていました。終戦直後、といつても昭和二十年代末くらい、若干余裕ができてからだと思ふんですが、作家仲間とか、作家さんとかひいきの飲み屋の女性だとか、奥様とか、もう本当に何でもかんでもなんです。池袋の料亭に呼んで、新年会なるものをほぼ毎年のように開催していました。ぼくが記憶している限り、手品をやらされたのは、だいたいその席でなんです。

栗原さんがおっしゃったように、見事に私めはめられまして、演出の一部として使われたのをよく覚えています。人前ではないところで、練習もさせられました。つぶれたゴムのビール瓶とか、何もない筒の中から羽が飛び出すとか、本当に他愛もないようなタネなんですけれども、子ども心にも、人がそれを見て喜んだり手をたたいたりするとうれしかったものですから、見事に術中にはまりまして、ずいぶんやった記憶があります。ただ、子どもでもできることしかやらなかったですね。手の幅が必要なこととか、そういう難しいことは一切やらされなくて、たぶん三十分も練習すればできるようなことばかりだったんじゃないかな。今の話を聞くと、本人もそんなことしかやっていなかったんじゃないかなと思います。

私の知り合いだった、新宿にあるマジックバーのお父さんが言うには、ダイスとかカードの類は指から血が出るまで練習するんだそうですが、そんな形跡は全くないですから、お察しのように、安直なもので楽しんでいたかなというふうに思いますね。

栗原 道具はずいぶんたくさん集めていますね。昭和十一年に別府で集めた道具以外にも、戦後、ゴムでできたビール瓶なんかのマジック道具をしこたま買ってきたなんていう話

も、平井先生のお父様（平井隆太郎氏）が書かれています。

平井 たぶん私を出したのは戦後で、新しいものをやらせようとしたんだと思うんです。戦後のものは扱いも簡単だったのかなと思いますけれども、そういうものをずいぶん自慢たらたらに見せられたなあというおぼろげな記憶があります。だいたい迷惑をかけるのはマジックと映画でしたから。映画もですね、昔だから部屋を真つ暗にして、じつと座っていないとお付き合いきけないんです。一本いくらというものじゃないんですけれども、こっちはお腹もすいているのに映画ばかり見せられて、いい迷惑だったなあ。

栗原 映画をご自宅でご覧になっていたのですか。

平井 はい。旅行に行きますと撮影をして、記録映画の上映をするんです。アルバムだったらばらばらっと見ればいいんですが、映画だと集中して見ないといけないじゃないですか。見てもらってナンボですから。旅行仲間の方々を家に呼んで、映画の上映会をやったり何かさせられた記憶はあります。

栗原 たいへんですね、手品の練習をちゃんと子どもにさせるというのも律儀だなあと、聴いていて思いました。その場でやらせてもご愛嬌だと思っんですけれども、ちゃんと前もって仕込まれたと今日初めて伺って、そういうところに

も、しっかりした乱歩のこだわりが出ているんじゃないか
と思いました。

平井 まあただ、ぼくの子どもの頃は、祖父はやっぱり忙しい
時代ですから、食事を一緒にしたりすることはあまりな
かったんです。だから呼ばれると、だいたいそういうこ
とになるんですね。ぼくのことを知っている作家の方が見
えたから、ちよつと顔出してあいさつしていらつしやいと
か、さもなければ今度の宴会でやる何とかを練習しなさい
とか。それはおもしろかったかと言えばおもしろかったん
ですけれども。

安 ありがとうございます。今お二人の話を伺っていて、部
分的に朔太郎と乱歩が乗り移ったんじゃないかなあと思え
るような部分もあつて、おもしろいと感じました。

交流のはじまり

安 ここで皆様、配布資料の方をご覧くださいますでし
ょう。おじい様の交流の始まりについて紹介させていただ
いて、それについて孫の立場から、これはないだろう、ある
いは、うんうんよくわかる、というような面がありました
らコメントをいただきたいんですけども。まず二人の交

流の始まりのところから、読ませていただきます。

啓

昨日は始めて伺ひ、所々珍しき所を御案内下された
上、とんだ御散財まで相かけ恐縮に耐えません。実は
マツサーヂの家を御教示に預かりたく、その内意にて
御訪ねしたる次第なるも、遇然に情意投合して面白く、
近頃になき愉快な半日をすごしました。小生も同好趣
味の友人なく、平常・寂寞に耐えざるところ、思はざ
る好知友を得て半生の喜悅と満足を感じました。マツ
サーヂの件などは何うでもよく、今後共親交御願ひ致
したく切望します。昨夜のユーカーリは特別に面白く、
お影様にて未知の獵奇趣味を満喫しました。稲垣君に
も近く御紹介申すべく、尚、小生方へも御遊びに御出
で被下御待ち致します。先は御礼をかね御挨拶まで。

敬具。

安

萩原朔太郎

江戸川乱歩様

追伸、小生は自分に關して秘密主義を守り、友人達
にも一切自己をかくしてゐる性分ですから、成るべく
他人には御内密に御願ひ致したく折入つてお願致しま

す。

萩原朔太郎書簡、江戸川乱歩宛 一九三二（昭和六）

年十月十六日消印

※筑摩書房版『萩原朔太郎全集』により、誤字とみられる字には「」を附しました。

安 いかがでしょうか。

萩原 その趣味はどういう趣味ですか（笑）。

安 先にこのユーカリとは何かということについて、お話しします。『萩原朔太郎全集』第十五巻年譜には、一九三二（昭和六）年秋に初めて会って、昼間二人で浅草の木馬館に行き、夜は新宿のバー・ユーカリで飲む、というふうに書いてあります。じゃあそのバー・ユーカリとは何かということについてですが、秋山澄夫という人が回想している文章があるので、ご紹介したいと思います。

秋山澄夫というのは、戦後、マラルメの『イジチュール』とか『骰子一擲』^{とうしいつてき}を翻訳したフランス文学者で、昭和十六年当時は、まだ早稲田の仏文科の学生ですね。それがたまたま朔太郎と知り合って、その朔太郎に連れて行ってもらったバーがユーカリだったんですね。じゃあちよつと読ませていただきます。

〔…一九四二年の新宿〕

目を閉じると一つの情景が浮んでくる。赤い電球の光がぼんやり照らし出したゲイバーの奥まった一隅に背の高い若い女が裸足で踊っている。（中略）踊りながら彼女が終始顔をその方に向けている隅の座席には、紬（つむぎ）かなにかを着流して兵児帯をきちんと後ろで結んだ初老の男がギターを弾いている。無造作に右わけした頭髮がぱらりと秀でた額に垂れていて、色の浅黒い痩せぎすな鋭角的な横顔はいかにも憂鬱そうである。この席にはもう一人和服の学生風の男がいる。

秋山澄夫「醒めた「無用の人」」（『毎日新聞』一九八二年十月二十日）

この初老の男が朔太郎です。ゲイバーだったんですね。学生風の男が筆者の秋山澄夫さんです。

青年が歌い、老人が弾き、女が踊る。歌はたいいきまっついて、『酒は涙か……』『一目見た時……』といった俗謡。萩原朔太郎氏とぼくとA・Y女である。

「醒めた「無用の人」

「酒は涙か溜息か」は、朔太郎が大好きだった古賀政男の曲ですね。「一目見た時……」は、「へ一目見た時 好きになったのよ 何が何だか わからないのよ」という昭和初年代のレコード歌謡「愛して頂戴」。早稲田仏文科教授でもあった西条八十の作詞です。

このゲイバー、ユーカーリというのは、実は新宿の隠れた名物酒場だったようです。全部で四、五人ウエイトレスがいて、皆、女装した男だったそうです。坂口安吾なんかも来ていたことですが、文学者がけっこう行っていたらしいです。これは栗原さんに確認いただいたのですが、戦後になって草野心平が回想で、そのゲイバーの主人は「おやま」だったと書いています（草野心平「前橋での萩原さん」初出一九五一年、伊藤信吉編『萩原朔太郎と詩的風土』（上毛新聞社、一九八一年に収録）。心平はその頃「火の車」という酒場をやっていたから、そのユーカーリのマスターさんとは、酒場仲間ということだったんでしょね。

朔太郎はギターを預けっぱなしにしちゃったようで、これは戦後の話ですが、そのギターも持っていて、朔太郎以外にも有名な文学者の色紙を何十枚も持っていた。そういうマスターだったそうです。

昭和十六年に戻ると、

ぼくは夜な夜な萩原さんのお伴を仰せつかる羽目になった。魔術俱樂部とやらの会員だった氏はギターにも飽きるとよろよろと席を起って、酔眼朦朧と客席を廻り出す。男娼の三味線に合せて、客の胸のポケットから十円紙幣を掴み出したり拾元からひよいとシガレットを抜取ったりした。新宿駅も扉（と）を降してしまふ頃、枯葉のように軽い飄々たる氏を担ぐようにして、タクシーを停め押込むようにしてドアを閉める。ぼくは下駄を曳摺って歩き出す。

「醒めた「無用の人」

安

翌年の春に朔太郎は亡くなってしまふので、これは亡くなる直前ですね。この店を朔太郎は乱歩から紹介されて、亡くなるまでお気に入りだったということになるんですけども。いかがでしょうか。

平井

そうですね。さっきの宴会と同様に、祖父は人を連れて歩くのが好きだったと聞いています。当然私は連れて行ってもらえる立場じゃないですけども、そういうふうに行っていたという話は祖母からいろいろ聞いていますし、サービス精神旺盛なんでしょうね。本人はほとんどお酒を飲め

ませんから、たぶん人に飲ませて喜んでいる方なんだろうと思います。お酒は本当に弱かったと思いますから、あえて飲もうとしなかったようですが、戦後になって少し飲めるようになったと自分でも言っています。それでもそんなに強くなかったかなと、むしろ祖母の方が強かったかなと思います。

晩年の祖母は、もちろん祖父が亡くなったあとですけれども、甘酒が大好きで、酒粕をお湯に溶かした簡単な甘酒を作るんですが、おいしくないと言って日本酒を足していました。ある程度アルコールがないとおいしくなかったんでしょうね。ですから祖母は、けっこうアルコールに強かったんじゃないかと思います。当時の女性ですから、当然一人で飲み屋に行って飲むなんてことはしなかったんでしょけれども、ひよっとしたらキッチンドリンカーに近かったのかもしれないですね。

安 館長はいかがですか。

萩原 私はゲイバーよく通いましたけれども。(場内笑) 新宿の二丁目なんか普通ですね。

安 おじい様に何か導かれるものがあつたんでしょか。(場内笑)

萩原 いや、最初にぼくが「毛皮のマリー」というお芝居をやっ

た時、美輪明宏さんが主役だったんだけど、ぼくの相手役は、新宿の二丁目でゲイバーをやっていたジミーというママで、そのお店もよく行きました。もう独特だよ。私、二十代だったから本当にもう、すげえなあこの世界って思いましたね。

栗原 どんな感じなんですか。

萩原 ニューハーフっていうような感じじゃなくて、やつぱり何ていうか淫靡な感じですね。でもみんなものすごい美人。「毛皮のマリー」では、ケニーさんなど銀座の有名なゲイバーのママたちが舞台上で踊るんですもん。何ですかこの世界は、と思いましたね。

安

「毛皮のマリー」は今年、美輪明宏さんが初演五十周年で、日本中で再演していますよね。ご覧になった方もいらっしゃるんじゃないですか。私は名古屋で拝見しました。五十年前そのままの演出なのかな。名古屋ですから、まさかわざわざ新宿二丁目のゲイバーの皆さんを呼んだわけじゃないでしょうけれども、劇団員全員、股間だけを三角巾で隠した全身白塗り、舞台上に並んでラインダンスを踊っていましたよ。

萩原 いやあ、美輪さんにはかなわないよね(笑)。

美少年と酒

萩原　でも、乱歩は美少年好きでよく言われるよね。

安　それはもう、朔太郎にははつきりと明かしていますね。

さっきの会った頃の手紙でも、「稲垣君にも近くご紹介申すべく」とありますが、この「稲垣君」とは、稲垣足穂いながきたるほです。稲垣足穂は晩年、澁澤龍彦や三島由紀夫など、通好みの文学者からものすごく再評価されて、まさに『少年愛の美学』で日本文学大賞を受賞した人です。朔太郎とはずっと交流があったんですね。乱歩は朔太郎に紹介されて足穂と知り合う。足穂と乱歩はまた非常に仲が良くなつて、二人で対談したり、「E氏との一夕」という、対談形式の少年愛についてのエッセイも書いています。Eとは江戸川乱歩のEですね。乱歩と足穂の交流は、実は朔太郎の仲介が大きかったんです。

その朔太郎からの乱歩宛書簡をまたご覧いただきたいんですが、これは手品のことも書いてあって、さつき栗原さんが言及しましたが、短いので読ませていただきます。

先日御手紙いたゞいてから、すぐ御伺ひして手品拝見したく、楽しみに思つて居たのですが、連日の炎暑

つづきで、とても外出が苦しく、今日まで冷しい日を待つて居ましたが、毎日の炎天で未だに出られない仕末です。二十二日に旅行しますので、明日でも若し冷しかつたら伺へますが、暑かつたら旅行後に改めて伺ひます。貴下とはすべて気持ちがあつて、まことに愉快な話ですが、そちらで酒を飲まないのと、こちらでクナーベの趣味がないのと、二つの食ひちがひで寂しいです。

萩原朔太郎書簡、江戸川乱歩宛　一九三六（昭和十一年七月二十日付、消印）

安

「クナーベ」というのはドイツ語で「少年」という意味です。少年愛の趣味ですね。「クナーベの方の同好（の）」士は、今度同行して伺ひます」こうも言っているんですねども。

萩原　これが足穂だろうね。

安

足穂だと思えますね。足穂の方の回想だと、実際に三人が揃ったことはなかった。けれど、朔太郎のおかげで乱歩と知り合えたということは繰り返し回想していますね。

平井

私は戦後の生まれですから、当然そういうやりとりのこととは知る由もありませんし、なんとも評論のしようもない

ですが、(場内笑) さつき言いましたように、宴会好きなことは間違いないですし、サービス精神が旺盛だということも間違いないので、そういう店に行くと、きつとモテただろうなというのは想像できますね。酒飲まないですからね。乱れることが有り得ないわけで、そういうところにお金を使ったら、非常に好かれる客だったでしょうね。

安 乱歩の方も、これに関連する回想をしています。

そののちは屢々、新宿などで落ちあつて、いずこともなくさまよい歩いたものである。こちらは酒のつき合いが出来ないので、彼が酔っぱらつて来ると少々閉口であり、彼の方でも何となく気づまりであり、そこがしつくり行かなかったが、もし私の方も酒徒であつたら、同氏とのつき合ひは、更らに頻繁であつたことと思われる。

江戸川乱歩「萩原朔太郎と稲垣足穂」(「宝石」一九五一年九月、『探偵小説四十年』一九六一年七月)

安 まあそうやって二人知りあつて、頻繁にゲイバーに行っているという。戦後になるとそれでも乱歩さんはお酒が飲めるようになるんですが、この頃は飲めなかったんです

ね。

平井 まあその辺は、きつと趣味があまり合わなかったんでしょう。たぶん後半になると、行きたいところも違ったんだと思うんですけれどね。

晩年の祖父は、最後はゴールデン街だったみたいです。それだったらタクシーでも大した距離じゃないので、ぐるぐる回つて、深夜に行っているのはどうもゴールデン街だったという話は聞いたことがあります。いまだにそういう系統の店はたくさんありますし、比較的安いですからね、あそこは。

萩原

少年愛の趣味に関しては、ぼくは本当にチャンスはいっぱいあつたんですけれどね。それは逃したの。残念と言えば残念で(笑)。天井桟敷は、それはもうホモセクシャルの巣ですからね。ところが寺山さんはそういう趣味はない。全くないです。ぼくもね、そのチャンスはあるんですよ。本当にかわいい男の子が踊っていて、ああやつぱりかわいいなあと思つて誘われるんだけどもね。今でも覚えているけど、「書を捨てよ町へ出よう」というお芝居の中で、セーターで短パンを履いて踊っていた男の子がかわいくつて、渋谷の喫茶店アマンドでぼくが女の子としゃべっていたら、その男の子が入り口で待っていて、「朔美さん、

今日帰りたいくない」って。あの時に一緒に夜をすごしたら人生変わったのね。踏み出す勇気がなくて、残念です。(場内笑)

安

残念でしたね。皆さんご存知だと思いますけれども、朔美さんは元祖美少年でいらつしやるんです。「毛皮のマリー」には、主演の美輪明宏さんに溺愛される美少年役がいて、今では公演のたびに「美少年募集！」という広告が出るんですが、五十年前の初演で朔美さんが演じたんだと思うと、非常にオーラを感じてしまいますね。(場内笑)

萩原

まあともかく、劇団は本当に美少年もいたしね、今日は寺山さんの弟の偏陸くんが来ているんで、彼に詳しく聴いていただければわかりますけれども、彼も元は美少年だったんです(笑)。

安

やっぱり朔太郎と乱歩だと美少年は外しちゃいけないよ
うな気がしまして。

浅草で木馬に乗る

安

まあとりあえず美少年は一旦置いておいて、まずこの二人の交流の始まりですよ。先ほど申し上げたように、全集年譜には一九三二(昭和六)年十月に初めて会って、同

じ日の昼間に浅草公園で二人で回転木馬に乗って、その日の夜に今度は新宿に行って、ユーカリに入ったと書いてあります。この年譜の記述は何によっているのか、ちよつとわからなくて、本当に同じ日に行ったのかなと思うんですけれども。ただ、同じ頃一緒に行ったのは間違いないように、乱歩が書いています。これは一九三二年、昭和七年に書かれたので、つい前の年の話なんです。

ごく近頃、去年の秋であったか、まことに久方振り
で、私はあの懐しい浅草木馬に乗ったことがある。連
れはその頃知合いになった詩人の萩原朔太郎氏で彼も
亦木馬心酔者であったから、私が恥しがるのを無理に
誘って、彼は木馬に、私は自動車にゴットンゴットン
と乗ったのである。その時、萩原氏と公園の古風な茶
店でお茶を飲みながら、通行の人々を眺めながら、博
覧会の余興について、昔々のパノラマ館の魅力につい
て、それらの醸し出すノスタルジアについて(ノスタ
ルジアとは何と久方振の言葉であったろう)語り合っ
たことである。

江戸川乱歩 「木馬は廻る」自作解説(平凡社『江
戸川乱歩全集』第十三巻 一九三二年五月)

いかがですか。

萩原

木馬に限らず、あらゆる遊園地の乗り物は全部回転する

わけだけれども、回転するということは、いわば三半規管に影響して、回帰して昔に戻るんだね。遊園地はなぜ回っているかという、みんな子どもに戻るための装置なんだ。だからそういう意味ではノスタルジアそのものだという。うーん、うまくまとめるね。(場内笑) 実は本気で思っているんですよ、私は。遊園地は世界で一番さびしい場所だというのをチャップリンが言っているけれども、まったく同感する。あそこへ行くと、本当にさびしい気持ちになる。だから二人がね、いい大人が木馬に乗っているという図のチャーミングさといったらないね。

安

朔太郎が四十四歳で、乱歩が三十七歳ですよ。四十四歳

の男と三十七歳の男が、年譜によればですが、初対面のその日の昼、二人でわざわざ浅草に散歩に行つて、二人でゴットンゴットン乗っているんですね。

萩原

いいですねえ。見たくはないけれども、イメージとしてはいいですよ。

平井

たぶん、浅草に行くのが目的でたまたま木馬があったから、意見が合ったんでしょうね。

パノラマ趣味と模型趣味

萩原

この時期、パノラマ館はありましたか。

安

パノラマ館の全盛期は明治末までです。ただ、その後も各地の産業博覧会などがたくさんあつて、そのアトラクションとして、戦前はパビリオンみたいな形で各地に設置されたんですね。

萩原

パノラマもそういう意味では、自分が神になった視点で見ただけだから、覗きだよ。パノラマ好きっていうのと覗きって、もう同じなんだよね。

平井

あれもね、視野を狭めて見るのがポイントですからね。全景を見てしまうと興ざめなんです。たぶんパノラマは、覗き眼鏡みたいなものを通して見るのが基本ですよ。

安

憲太郎さんは、「とれいん」という鉄道模型雑誌を創刊されて、エリエイという出版社から出ている。鉄道趣味と鉄道模型の総合的な愛好雑誌というんでしょうか。

平井

鉄道模型が好きなのは人のための雑誌なんです。最初はそんなつもりは全くなくて、高校生の時に、今でも出ていますけれども「鉄道ジャーナル」という雑誌でアルバイトを始めたのがきっかけでその道に入ってしまったんですが、それで食おうとすると、月刊誌じゃないと食っていけない

です。単行本だけだと本当に単発的だし、当たるかどうか全くわからないし、やっぱり最低限食っていくには月刊誌にするしかないだろうということになって、二十四、五歳の時に一歳上の相棒と話をしまして、この際月刊誌やるか、となつて、今からすると恐ろしい話なんですけれども、まあ何とかそれでスタートしたんです。その時は、写真を撮るとか、機関車の来歴を調べるとかいう雑誌は既に三つくらい出ていて、割り込む隙がないからじゃあ模型やるか、みたいな感じで雑誌を始めて、今に至っているんです。

だから、邪心がなかったかというところ全くはないんですけれども、ただぼくの鉄道趣味のものとスタートは模型、まあ男の子はみんなやりますよね。今だったらプラレールですけれども、そういう鉄道模型を子どもの頃やっていましたし、父などは完全な文系人間の割には思いのほか機械好きで、鉄道模型の機関車を作るような器用さは全くないんですが、怪しげな改造をするのが趣味でした。私はだぶんダシだったと思うんですが、そういうのに一緒に乗せられまして、一緒に遊んでいたんですね。それがだいたい鉄道模型が好きになるきっかけで、高校に入ってバイトをする前は、どっちかというと模型マニアだったんです。でもまあそういうおもしろいバイトをさせてもらつて、だんだ

安

んそっちの方にはまつて行つたというのが流れですね。今回の「パノラマ・ジオラマ・グロテスク」というのは、こちらの学芸員の方が考えたメインタイトルですけれども、ジオラマなんていうのは憲太郎さんのために準備したタイトルのようですね。

萩原

本当だよ。模型をやつてらしたつて聞いて、ぞつとしましたよ。ああやつぱり乱歩だつて。

平井

たぶんそうですね。乱歩が元気な頃には、ぼくの鉄道模型趣味はおもちゃ程度でしたので、レベルの高い模型を見てもらつた記憶は全くないです。亡くなったのはぼくが中三の時で、その頃にはけっこうレベルが上がつていたと思うんですが、もうずっと具合が悪くなつたのでね。それでも、祖父はそういうものに昔から興味があつたんだろうと思います。横溝正史さんのご子息、亮一さんでしたっけ。この間亡くなられましたが、うちの父とほぼ同い年なんです。その方がまだ小さかつた頃、祖父がおもちゃの機関車の模型をプレゼントしたんだけど、何だかうまく動かなかったらしくて、取り替えるようにと書いた手紙が、横溝さんのところに残つていたんですよ。子どもにあてた手紙なので、平易な文章で書いているんですが、そういうことに興味があつたんじゃないかと思っています。

父もたぶんそうだったのかな。父が中学生くらいの際に、ばかでかい模型飛行機を作って自慢げに写っている写真が残っています。昭和十年前後ですね。その割に全く機械系に行かず、百パーセント文系人間でしたけれども。

乱歩は恐妻家？

安

江戸川乱歩の本名は平井太郎です。平井家の太郎ということで。先程お話いただいた乱歩の奥様は、お名前は隆子さんといって、もともと鳥羽の方で小学校の先生をなさっていて、女子高等師範学校のご出身ですよ。

平井

神山にあったそうです。古城があるところ。

安

そうですか。先ほど控室で、乱歩が恐妻家だったみたいなお話が出ましたけれども、晩年のおばあ様を見ているとそんな感じがありましたか。

平井

そうですね。ぼくにとってはおいしいさんとおばあさんです。基本的には孫には優しいわけですが、まあいいう仕事をしていますと、事務量が非常に多いわけですよ。手紙を出したりとか、帳面をつけたりとか。それから皆さんご覧になったように、本の背にインデックスを貼ったりとか、これは半分趣味なんですけれども、細かいこと

をたくさんやっていた。何年何月にどの本が第何版まで出たなんて記録も全部残っているんです。そういうことをつける趣味もあったんですけれども、本人、忙しくなったり、手が不自由になったりして、だんだんできなくなったり、普通だったら自分の妻に頼むと思うんですが、なぜかうちの母、つまり息子の嫁にやらせているんです。どうも本人が言ったららしいんですが、難しいことを自分の妻に頼むと、「一言うと十返ってくる」と。どういう意味かわからないんですけれども、十聞かされるくらいだったら、黙っている嫁にやらせようみたいなことで、うちの母は静子というんですが、廊下の奥の方に祖父の部屋がありまして、妻の名前を呼ばずに、「静子、静子」と呼んでいるのを、子どもの頃ずいぶん聞いたことがあります。まあ、妻よりも安心して任せられたのかなと思います。

うちの父が書いたものによれば、結婚した当初はかなり貧乏だったそうです。ちょうど三人書房（乱歩が営んでいた古書店）の頃に結婚しているんですけれども、あの時は本屋をつぶしていますから、たぶん全く金がなかった時期があるんだろうと思うんです。その頃にうちの父も生まれています。父の回想によると、金がないことをデモンストラーションするために、祖母が空のおひつをしゃもじで叩

いていたという、ちよつとね、家の主としてはかなりつらい状況に追いやられたのかなあと 생각합니다。稼げつて言われたって稼げない時は仕方がないと思うんですけれども、そのぐらい強力にやられていたらしいので、その気分はなかなか抜けなかったのかなあと 思います。たいへん頭の良人だったとうちの母も言っていましたし、身なりもきれいだっただんですけれども、なかなか厳しい人だったんですね。

受け継いだもの、受け継がないもの

安 本名は平井太郎で、その息子で憲太郎さんのお父様に当たるのが、立教大学社会学部教授の平井隆太郎先生、そうして憲太郎さんというふうに三代にわたるわけですけれども、どうですか。おじい様、お父様、憲太郎さん、ああ、これはやつぱり血筋だなと思う面とこれはちよつと違うんじゃないかという面と、それぞれお考えになるようなことはありますか。

平井 あまり真面目に考えると頭がおかしくなってきましたので考えないようにしているんですけども、まあ整理魔は似てしまいましたね。何か本当にいやなところが似たなと思います。妻にも言われます。あとはそうですね。うちの

父も祖父もけつこう理詰めの方で、ああいう小説を書いている割には祖父もかなり理論家ですから、その辺は似て良かったのかなあと 思います。ただ、いささか怪しい趣味は幸いにも、不幸にも継承していません。（場内笑）この辺は、朔美術館とはなかなか相容れないところがあるわけですけれども（笑）。

萩原 なんです（笑）。私も覗きの趣味はないんですけども。

萩原の本家が大阪の八尾市にあつて、家がもうボロボロで取り壊すかもしれないというので、この間そこを訪ねて写真撮ってきたんですが、その時に、朔太郎の父親のお兄さんの子孫に会ってきました。萩原隆さん（朔太郎の父方の従兄・栄次の長男）の息子さんの正之さんという方にお会いしてきましたが、奥さんも子供も本人も、全員医者でした。子どもの頃から、萩原に生まれたらみんな医者になると 思っていた、と言っていました。正之さんは朔太郎そっくり。萩原に生まれたら医者になると正之さんは言っていたけれど、私の方の血筋は、勉強は一切だめなんですと言っておきました。あんなうちに生まれたたいへんだろうなと思いました。その辺はどうでしょう。

平井 うちが祖父も父に何も強制しなかったみたいですし、父

も私に何も強制しません。私も息子には強制しないようにしているんです。そういう意味ではいい家だったかもしれない。作家なんていうのは、言われたって続けるものじゃないですし、父を見ていて、教員だけはないと思うと思いました。あんまり楽しそうじゃないし。(場内笑)

安 楽しくはないですよ。(笑)。

平井 特にぼくが学生の頃は大学紛争真つ盛りの頃で、父が非常に苦労しておりました。学校が封鎖されているから教授会が学校で開けなくて、一時的に会議室を借りてやっていたり、そういうとんでもない時代にその姿を見ているものですからね。

安 大学総長代行までなさったのですか。

平井 なさったというか、させられたというのがたぶん正しいですね。家から近いですから、すぐに所在が把握されるわけですね。逃げられないですね。寝ているところを押えられますから。

旧乱歩邸と蔵

安 立教大学に行くのですが、塀を隔てたすぐ隣の家が乱歩邸なんです。学生部事務室から歩いて一分でしたね。

平井 立教の五号館からなら、歩いて一分ですね。正しくはうちの方が古くて、いや正しくは立教の方が古いんですが、うちはもともとは立教の隣じゃなかったんです。立教が焼け跡をだいぶ買い集めて、うちの隣に建物を建てたので、結果的に隣になったという形なんです。どっちにしても近いことは近いです。

萩原 あの蔵も焼けないで残っていたんですか。

平井 はい。それは奇跡とよく言われるんですが、うちの周りは皆焼けているんですね。今はモリス館と呼ばれている立教の記念館、あの時計がある建物は、アメリカの聖公会、アングリカン・チャーチ(聖公会)の宣教師の方(アーサー・ラザフォード・モリス)の寄付で建てられているので、ひょっとしたら標的を外されたのかなという話はあるんです。ただ、私の家のすぐ裏に同じ聖公会の神学校がありまして、これは丸焼けになっていないんですね。祖父が、蔵にいとそここの鐘の音が聞こえるという文を書いているんで、知っていらっしやる方もいると思うんですが、それは空襲で丸焼けになっていまして、うちは残ったものですから、ちよつと的外すところを間違えたのかなと。それと、その前にすでに焼けているところもあって、いろんな方がうちに避難されていたので、その人たちが消火するの

に協力してくれたということはあるみたいですね。祖父はそれで恐ろしくなって、そのあとで本を疎開させているんです。全く無駄だったんですけれどね。

萩原 蔵と、それから応接室が残っていますが、あれも焼けたかったんですか。

平井 応接室は昭和三十年代に造ったんです。蔵と蔵の手前にある、今は研究棟になっているあの部分は、大正時代の建物で、蔵の方が新しいらしいんですが、蔵は関東大震災のあとだそうです。

萩原 ぼくは応接室に入らせていただいたんですけど、すごいソファが置いてあるんです。座るとうわっとお尻が半分くらい沈んじゃうんです。

平井 まあ今時のものじゃないですよ。昭和三十年代くらいの造りなんで、たぶん柔かければいい時代のものなんですよ。

萩原 あれは珍しいですよ。

平井 あれもちゃんとスプリングが入っているんですね。まだウレタンじゃない時代ですから。

萩原 あれはそうですね。椅子にすわってぐわっと沈んだから、ああ人間椅子だっと思いました。(場内笑)

安 表札は平井太郎、平井隆太郎になっていて、江戸川乱歩

はあくまでペンネームなので、それだけだと前を通ってもなかなか気付きませんけれども、奥の方にある蔵はやはり目立っていますから、本名を知っている方はあつと思われたと思うんですけれども。

平井 もうちょっと前の時代になると、質屋さんはみんな蔵を持つていましたし、うちの裏の方にも質屋さんの蔵がありましたから、蔵自体はそんなに珍しくなかったですね。質屋さんは預かり物がいっぱいあるわけですから。今でこそ珍しいですが、乱歩が生きていた頃は、蔵がある家というのがそんなに珍しくはなかったかもしれないですね。

安 ただそういう商売じゃなくて、個人の家でああいう二階建ての蔵というのは珍しいのでは。

平井 確かにそうですね。というか蔵のある家を選んで引っ越してきたわけですからね。だから乱歩が建てた家ではもちろんないですね。立教に譲る時に、立教の学芸員の方が調査して下さったら、関東大震災の直後に防火の蔵を立てるのはものすごく流行ったそうですね。みんな丸焼けになった痛い経験を持って、下町の方から山の手に引っ越して来て、その時に建てられた蔵が非常に多いらしいです。今考えるとよくわからないような耐震構造を取っていますので。

萩原 ぼくはあれを見ていて、夫が妻の目を盗んで夜中にこつ

そり蔵に行く話を思い出しました。

安 「人でなしの恋」。

萩原 あそこで人形と逢引しているんだみたいなの、淫靡な蔵の感じがあるよね。それが思い浮かんじゃうね。

安 そういえば、私たちも調査のために学芸員の方と一緒に蔵に入ったんですが、蔵に行く途中の廊下に、妙に生々しい博多人形がポンと置いてあったんですけど、あれは？

平井 博多人形はたぶん昔からのものじゃないとは思いますが、ぼくが子どもの頃には、いただき物の文楽人形の首が本棚の上に立っていました、あれは片づけてしまったんですけれども、かなり怖かったですね。首だけですから。（この博多人形は夢野久作さんからの頂き物だそうです）

おもしろい保管庫

栗原 憲太郎さんが子どもの頃は、中には入れたんですか。

平井 まあ乱歩がもう元気がなくなってからですけれども、入るのは自由でした。読めるものもけっこうありましたし。特に小学生でも戦前の総ルビの本は旧仮名ながら全部読めるので。それはそれでけっこうおもしろかったです。なんか偉そうな自分がいて、どうだ、俺は旧仮名が読めるぞっ

て思っていました（笑）。

安

今はもうあの蔵は、まぼろし幻影の蔵と言われて、蔵そのものがすごく特権的な場所というふうになっています。特にそこに置かれていた江戸時代の男色関係の文献については、立教が入手した時、近世文学研究家が非常に喜んだということもあるようですが。そういうことも含めて、どうなんでしょう。今は豊島区の条例できれいに作り直していますよね。その前はちよつと壁が崩れかけたような白塗りで、曇った空のところで見るとちよつとおどろおどろしい感じがしたんですけれども。

平井

それは、最後はあまり手入れをしなかっただけで、乱歩が生きていたころは、そんなには傷んではいなかったんです。もともと書庫として蔵を使っていたんですけれども、当然のように入りきらなくなりました、結果的には北側の裏側に掘立小屋を建てて、そこにあふれた本を全部入れていました。今は完全に母屋と切り離されていますが、祖父が引越してきた時には、母屋と蔵はつながっていたんですね。ですから自分の寝室と書斎が蔵に一番近いところにあっただけです。そこから引き戸を一つ開けると、すぐ蔵に行けるようになっていて、ある意味書庫としての機能としては良かったのかなあとと思います。普段使う本は自分の書

斎に全部置いていて、それ以外の本は蔵とその脇の掘立小屋に入ります。

ただ、豊島区から文化財の指定をいただいた時に、補助金もたぶん出たんだと思うんですが、壁を直すためには掘立小屋を壊さないと直せなかったんですね。どっちを優先させるかということで、我々が住んでいた生活スペースを書庫にして、脇の掘立小屋に収まっていた本を全部そちらに移動して、掘立を壊しました。掘立なんで最後の方は雨漏りがすごくて、やっぱりそれも、壊す大きな理由の一つだったかなと思います。

安

それにしても、蔵ですからね。蔵というと私の父親は戦前生まれで、いたずらをするとか蔵に閉じ込めるといいうのをやる世代です。今だったら児童虐待ですよ。蔵というところと鼠がいたりして怖いイメージしかないんですけれども、憲太郎さんはそんなことを全然考えず、純粹に本の宝庫だ、知的な場所だと、そんな感じでご覧になっていたんですか。

平井

知的な宝庫かどうかはわかりませんが、おもしろい保管庫だというイメージはありました。当然男色系の和書なんて読めません。物理的に読めませんので、幸いそういう世界に触れることもなく、(場内笑)『群書類従』だとかそういう本もあつたんですが、小学生には読み通せるような

ものではなくて、普通の口語文で書いたものしか読めませんでしたから、道を踏み外すことなく今に至っております。本当に書庫としての機能がはつきりしていたので、怖いということはなかったです。一番重い扉は常に開けっ放しになっていましたし。

安

今は定期的に公開されているんですね。

平井

家自体は、基本的には週に二回、水・金は公開日になっています。土蔵は外から中を覗くだけです。時々休みがありますから、一応確認された方がいいと思います。

ほめられること、ほめること

安

ご興味あれば、ぜひ皆さん行っていただけばと思うんですけれども。朔太郎がそこを訪ねた時のエピソードというのを、戦後の乱歩が書き残しておりますので、読み上げさせていただきます。

昭和九年か十年ごろに、私の現在の池袋の家へ、同氏が遊びに来たときのことか記憶に残っている。萩原氏はその時濃紺の結城紬の羽織を着ていたのを覚えていた。当時私は土蔵の中を書斎と客間にしていたので、

そこへ通したところ、真中に大きな段梯子があったりして、屋根裏のような、或いは船室のような感じがするといつて、同氏は興がったものである。その卓上に膳をおき、日本酒をチビリチビリやりながら、二人は内外の怪奇文学について語り合ったのだが、萩原氏は私の「パノラマ島奇談」を案外高く買っていて、「あれはいい、あれはいい」といつてほめてくれた。

江戸川乱歩「萩原朔太郎と稲垣足穂」(『宝石』一九五一年九月、『探偵小説四十年』一九六一年七月)

「昭和九年か十年ごろ」と書いていますが、これは昭和十年ですね。「濃紺の結城紬の羽織」という格好ですが、乱歩邸の土蔵で館長に再現していただいた写真が、展覧会で展示されています。このあたりはいかがですか。

萩原 「パノラマ島奇談」(『パノラマ島奇譚』) って、男だったら本当に夢想する感じじゃない。完璧に自分で人工のものを作っちゃって、そこには生きた人間が、ああいう状態にいるわけでしょ。これはすごいよね。ぞつとするね。もつとぞつとするのは、女房をだまし切るといふことだよ。嘘がばれないようにするというのは、相当な演技力だよ。

平井 そういうことを想像できるだけでもたいへんだと思います

すね。物書きの方はみんなそうなんだと思いますが、評判というのをすごく気にしていて、自分の自己評価は極めて低いので、人がほめてくれるとすごく喜ぶんですね。その傾向はうちの祖父にはどうもあるようです。たぶん晩年までずっとそうなんです。ほめられたときにそんなわけがない、というような記述は全然ない。だいたい素直に喜んでいますので、あんなにほめがいのある人はいなかったでしょうね。

萩原 良い書評が出ると、すごく嬉しそうに見ているものね(笑)。

栗原 乱歩は後進の作家をたくさん育てていますよね。若手の探偵小説家とか、晩年にはSF作家を世に出すこともしたと思います。悪いと思ったことは、手記には書いていても公表せずに、いいところだけを発表している。乱歩自身はほめられると非常に喜ぶということがあって、人にもそんなふうにしていたんでしょうか。

平井 たぶん、けなされて痛い目にあつた記憶がたくさんあるんだと思うんですね。けなされたことはやたら書いていますからね。もちろん私が知らない時代なんですけれども、けなされると本当に痛かったみたいで。やはり後進を育てるには決してけなしちゃいけないという不文律は、自分

で自分に作っていたんじゃないでしょうか。直接には言ってもいいけど物には書かないみたいな。

栗原 先ほどのお話で、整理癖の部分は非常に引き継いだいうことでしたが、そういう他者への気配りなども受け継いでいらつしやるのでは？

平井 そればかりは、別の人に聞いてもらえますか（笑）。

栗原 ああそうですね、すみません。ご自分では評価できませんよね。（場内笑）

乱歩がそうやって人を世に出していたように、朔太郎もいろいろ調べていくと、さっきの稲垣足穂を紹介するとか、梶井基次郎が世に出たきっかけも、最初に朔太郎が梶井を評価して「近代風景」という雑誌に紹介したとか、仲間の作家が書いていたりするわけですが、下の人たちに慕われていたというのも、ひょっとしたら二人の共通点なのかなという気がします。

大衆文学、小衆文学

平井 先程安先生が、大学の卒論で探偵小説をテーマにしようとした時、面倒を見てくれる先生が誰もいなくて断念したという話をされていましたけれども。

安

当時は、まだまだそういう時代ではなかったです。（安の追記。当時もつとも先端的な研究者だった、前田愛先生は引き受けてくださったのですが、大学四年（一九八七年）の夏に先生が急逝されて、断念しました。）

平井

本当にある意味、ジャンルとしては、まったく学術研究の対象外というジャンルだったということです。乱歩本人は、そういうことになり義憤を感じていたみたいですね。自分が一番いいと思ってやっていたのに、全く娯楽としてしか評価されないというようなことに憤りのようなものを感じていて、だからこそ、もっと書く人間を増やして幅も広げて、ジャンルとして確立したいという希望は、今から見ると相当強かったと思うんですね。本人自身はタネ切れを完全に自認していましたので、それまで以上におもしろいものを書く自信は、たぶん、少年もの以外にはあまりなかったと思うので、そういうことに力を入れたのはあるでしょうね。仲間を増やしたいというんでしょうか。

萩原

一言だけ、その乱歩が感じていたことを、全く今でも感じているんだけど、大衆文学って書いてあるんですね。大衆文学の研究所って立教大学の乱歩邸のところに書いてあるんだけど。大衆文学の対極は何かというところ、例えば純文学としますよね。そうしたら、いわば大衆文学

が詩や小説の下に思われる。表現にヒエラルキーが、何であるんですか。アートとデザインもそうなんです。デザインが下のような感じ。ハイ・アートという言い方がある。

大衆文学の対は、小衆文学。それ以外ない。だってそんなこと言ったら、詩集なんて五百冊でしょ、小衆文学じゃないですか。何威張ってんだという話です。だから私は大衆文学、小衆文学、全部文学というふうに思いますね。表現にヒエラルキーがあって、漫画が下だって思っている人がいるんですよ。どういう根拠なんでしょうか。

平井 一次制作物と二次制作物っていう、それはもちろんあるとは思いますが、漫画はもう二次制作物ではないですし、今は漫画のノベライゼーションというのが逆にありますからね。

安 「パノラマ島奇談」は、丸尾末広がすばらしいコミカライズをしていて（丸尾版は「パノラマ島綺譚」、今この文学館の三階に、原画ではないけれど、出版用のデジタルデータから直接それを引き延ばしたすばらしいものが展示されています。丸尾末広の美しい繊細な線が拡大されているので、皆さんぜひご覧いただきたいと思います。

安

先ほど、朔太郎が乱歩の「パノラマ島奇談」をほめたことをご紹介しましたが、あとは「人間椅子」を絶賛しています。その両方について、乱歩は最晩年、一九六〇年代の亡くなる直前になっても、萩原さんがほめてくれたと非常に嬉しそうに書いていますよね。

一方、朔太郎のことを乱歩がどのように見ていたかという、続きを読むと、乱歩はこう書いております。

私が萩原氏の詩とアフORIZム以外では、「死なない蛸」と「猫町」とを最も愛することは、別の随筆にも書いた通りであるが、その時はまだ「猫町」を読んでいなかった。それ以来、萩原氏は著書を出す度に、贈ってくれるようになり、自装の「青猫」や「猫町」や数々のアフORIZムを、私は愛読したものである。

「萩原朔太郎と稲垣足穂」

朔太郎の作品では、「猫町」や「死なない蛸」が一番好きだということですが、これはやはり、資質的なものなんでしょうか。

平井 ちよつと私は何とも言い難いのですが。本人の気持ちはわからないですね。

安 館長いかが思われますか。

萩原 私もちよつと…。何であんなに気持ち悪いのが好きなのか。(場内笑)

平井 ぐにやぐにやうねうねしたものが好きだというのは事実ですから。

安 ぐにやぐにや、そうですね。

平井 ちよつと変な表現ですけども、ぼくにはそうとしか言いようがない。

萩原 触覚に対してというのはあるね。「人間椅子」なんかは、いわば触覚に関する話でしょう。

安 まさにもう触覚だけの世界です。

萩原 乱歩は実際に触覚と言っているじゃないですか。芸術は目で見る芸術と耳で聴く芸術と理智で解く芸術と、もう一つ、触覚で感じる芸術がなぜないんだと書いているんだけれども、やつぱり触る人なんですね。確かにそういう意味では、美術館は全部触ることを禁止していますからね。最近是企业展で、どうぞお触りくださいというのはありますけれども、まあ普通はないですよ。

安 もう少し、体験型のさわれる美術館、文学館の展示があ

ると本当にいいなと思いますね。

触覚をたいへん愛好したということに関して、憲太郎先生がぐにやぐにやしたとおっしゃいましたが、乱歩の初期作品には「ムクムク」「ゴロゴロ」などのオノマトペが本当に多いですよ。あれは非常に魅力的です。朔太郎もやはりオノマトペが多いし、「腕のある寝台」とか「その手は菓子である」とか触覚を描いた詩があります。二人の文学では触覚というのが基本と思います。

孤独な探偵と元氣な探偵

安

詩の方が短くて済んでしまうので、どうしても朔太郎の作品の引用になってしまっていますが、せっかくですから、これについて、孫の立場からどうなのか伺えればと思います。江戸川乱歩はデビューが一九二三年(大正十二年)で、朔太郎は乱歩より八歳年上ですけど、実際作品的にも八年くらい早く探偵小説的な詩を書いているわけです。たぶん探偵小説的なモチーフを詩に入れた最初の人じゃないかというふうに思います。二人は趣味が似ているので、たまに朔太郎が年上で先に作った詩だと思えますけれど、「殺人事件」です。

殺人事件

萩原朔太郎

年二月

とほい空でぴすとるが鳴る。

またぴすとるが鳴る。

ああ私の探偵は玻璃の衣装をきて、

こひびとの窓からしのびこむ、

床は晶玉、

ゆびとゆびのあひだから、

まつさをの血がながれてゐる。

かなしい女の屍体のうへで、

つめたいきりぎりすが鳴いてゐる。

しもつき上旬はじめのある朝、

探偵は玻璃の衣装をきて、

街の十字巷路よつじを曲つた。

十字巷路に秋のふんすぬ。

はやひとり探偵はうれひをかんず。

みよ、遠いさびしい大理石の歩道を、

曲者くせものはいつさんにすべつてゆく。

「地上巡礼」一九一四年九月、『月に吠える』一九一七

この詩に関して、いかが思われますか。

萩原

要するに、その書いている詩人は、探偵じゃないですか。

「私の探偵」というのは、結局、私の心が探偵になつていくというわけで、私がどうのこうのというより、何か事件があつたり、何か事が行われているものに対して、探偵のような自分が調べて行っているうちに、「わたし」というものはなくなっちゃうんだよね。人様の出来事を追いかけていくと、そういう孤独みたいなものが現れてくる。探偵という商売ほど孤独なものはない。人の生活をずっと、言わば観察しているということだから。

でもなんでそんなに派手な着物を着ているんだろうね。

「派手」じゃないか。

安

「玻璃の衣装」を着ているという。

萩原

玻璃の衣装ってどういうものでしょうね。

安

玻璃を「ガラス」と書きちゃうと普通に工業用ガラスみたいだから、わざわざ「玻璃」と、古代ペルシャのシルクロードなんかの工芸品としてのガラスみたいな、あるいはベネチアグラスとか、そういう感じを出すために、わざわざ「玻璃」というふうに書いているんだと思います。たぶ

んこれは、宮沢賢治の「風の又三郎」のガラスのマントに影響を与えていますね。賢治は『月に吠える』をだいぶ愛読したみたいですから。

萩原 朔太郎は、ガラスへの親和性があつたと思うんですね。

やつぱり実家が病院だから、あらゆる器具がガラスじゃないですか。体温計もガラスだし、最も重要なのは、レントゲンの表面って昔はガラスじゃないですか。今はそうじゃないんだけど、胸を当てると冷たい。そういうガラスに対する親和性って、絶対あると思う。ガラスっていう表現は、病院だからなんだなつてつくづく思いますね。それと、カメラだってガラス越しに覗いていますよね。本当にガラスに親和性があるんですよ。

安 憲太郎さん、いかがですか。

平井 ぼくは何ともね、その世界に触れていないのでわからないんですが、今館長がおっしゃったその、探偵は孤独だつていうのに比べて、明智小五郎はなんて元気なんだろうって感じますね。あの美少年趣味の。(場内笑)

萩原 美少年趣味！(笑)

平井 そう小林少年。わりと早い時期から出て来ますし、やつぱり、参加させたかったんでしょうね。一番最初はたぶんミスリードで、探偵の明智小五郎を作ったんでしょうけれど、

ども、だんだんやりたいうように変えていったんだと思うんです。たぶん一番最初は、どこか外国のパターンを少し模倣したんだろうと思うんですが、だんだんかつこ良くなつていつて、自分が作りたいように変身させていったのかなと。そういう意味では全然寂しさはないですよ。

栗原

確かに、探偵団もののラストでは、皆に囲まれて「明智先生バンザイ」で終わってますよね。

安

二十面相を捕まえた後、美少年の小林さんと明智先生とが師弟愛で、ひしと抱き合つて、周りの少年探偵団員はそれを微笑ましく見ている、バンザイと迎えるんですよ。

〈質疑応答〉

最近読んだ本、忘れられない本

安

ここで、皆さんからのご質問を受けたいと思うんですけども。その前にちょっと一つだけ、私がツイッターで、何か質問がありましたらお寄せ下さいというのを募りまして、いくつかあつたので、先にちょっとその質問をさせていただいて、続けて会場の皆様からの質問を受けるといふうにさせていただきますと思います。

まず一つ。「祖父を世に送り出した大正文化についてどう思いますか」という、たいへん大きな質問です。

萩原 それはちよつと、ご自分でお考えくださいと（笑）。

安 まあそうですね。じゃあもう一つ。非常に素朴な質問です。「最近読んだ本で、おもしろかったもの、ミステリー、詩集、写真集、本であればどのようなものでもいいのですが、教えてください」。そういう質問です。

平井 かなり難しいですね。最近読んだ本と言われるとね。

安 最近じゃなくても何か、忘れられない本でもいいと思うんですが。

平井 そうですね……。うちは見かけによらず理系だという話をさっきしたんですけど、もう亡くなりましたが「NEWTON」の編集者をやっていた竹内均さんという科学評論家がいて、その方がまだ若い頃に書かれた『地球の科学』という、今でもあるブルーバックスの本を中学生の時に読みまして、それが今はごく当たり前になっているウェゲナーの大陸移動説の解説書だったんですけども、ものすごいインパクトを受けました。今では、大陸移動説自身は継承されましたけれども、書いてあることの半分くらい嘘だということがわかってはいるんですが、ああそうか、こういうのがおもしろいんだみたいなね。ぼくが一番インパ

クトを受けたのは、たぶんそれかなと思います。

安 SFの『日本沈没』の先駆みたいですね。

平井 そうですね。『日本沈没』はあれがベースですもんね。

萩原 ぼくが最近見た本では、ラスコー洞窟のカタログですね。今まで全く誤解していたんだけど、ラスコーつてもすごい迷路なんですよ。人間たちはあそこで生活していない。人間が生活する物が一切ないくらいものすごく深いところまで行って、油を燃やして、それで牛さんを書いていう。そこでは一切食事もしていない。それは何なんですか。という。あらゆる芸術は、芸術というのはぼくらが勝手に言っているんだけど、本来の目的はわからない。ぼくは、あらゆる芸術は、宗教画も含めて全部ポルノだと思っています。それ以外の用途はないと確信しているんだけど、あの人たちは何で牛なんですか。それがわからない。牛はポルノじゃないんだよ。しかもね、動いているんですよ。足が何本にも描かれている。つまり、真つ暗なんですよ。地下何十メートルも入って行くんです。そういうところで松明を動かしていると、足が動いているように見えるんです。だから映画の原点だと言われているんですよ。だけど、なぜそれを描いたのかわからない。図録を読んでいるんだけど、それを解説してくれていない。

もう一つは雑誌「すばる」で、評論家の伊藤俊治と宗教学者の植島啓司が対談してるんだけど、それがむちゃくちゃおもしろかった。『進化論』のダーウィンは、実はセックスについて二冊書いてる。セックスが人間を進化させたってことを書いてる本は、やっぱりビクトリア王朝だから、発表当時は無視された。だけど本当はこっちの方が書きたかったと。それがすごくおもしろいんです。

それから昨日は、安さんが朔太郎についてのことを書いている本（安智史『萩原朔太郎というメディア ひき裂かれる近代／詩人』二〇〇八年一月）を読んで、ああこういう分析なのか、と思いました。

安 恐縮です。お手柔らかに（笑）。

病気だったと思うところ

安 じゃあ会場の皆様から、ぜひご質問を受けたいんですけども、どうぞ遠慮なく挙手をいただけますでしょうか、お願いします。

質問者 A おもしろいお話をどうもありがとうございます。お二人から見て、おじいさんたちが病気だったなあと思うところを教えてください。

平井 ぼくが知っている祖父はもう六十過ぎでした。生まれた

時は五十七かな。物心ついてからはもう六十過ぎでいて、実を言うと、いたってまっとうな姿しかあまり見ていないんです。あとになって、皆さんが祖父について書いたものを読んだりとか、祖父が書き残したのについての解説を聞いて、ああなるほどね、と思うところはあるんですが。確かに、片づけ魔だとかコレクションマニアだとか、そういうところはかなり変です。今から思えば変だと思うんですが、その私はそういう人しか知らないわけだし、その当時うちの祖父に会われた方も、想像以上にまっとうだということを書いてるんですよ。たぶん想像する姿はかなり危なかったと思うんですが。（場内笑）想像以上にまっとうだったと書いていらっしゃる方が多いので、孫から見ただけですが、そういう評価だというふうに取っていただいてもいいのかなと。あまり答えになっていないかと思いますが。

栗原 一ついいですか。さつき控室で、新年会で人をたくさん

呼ぶのに招待状を出した時、乱歩は自分あてにも招待状を書いていたというお話をされていましたが。

平井 まあ全部が全部ではないんですけども、実行委員会なんかで自分が主催者の一部になっている場合には、自分あ

てにも出したんですね。自分だけが呼ぶ時には、さすがに自分には出さないようですね。何とか実行委員会とか、何とか委員会からご案内を出すときには、全部自分が取り仕切っている自分あてには出した。

栗原 実際にそういうお姿をご覧になっているんですか。

平井 いや私は見ていないんですが、例の有名な「貼雑年譜^{はりざねんぷ}」には、わざわざ自分宛のが貼ってあったりするんです。

栗原 すごい。普通は自分あてに手紙なんか出さないと思うんですが、一人二役に通じるようなことを生活の中でやっていたんだなと思って、たいへんおもしろく伺いました。

安 二度手間でも自分あてに出していますよね。

平井 最近、パソコンで機械的に出すと、自分あてに勝手に出ちゃったりしますからね。

萩原 ぼくはわざと自分あてに五十通くらい出したことがあります。いろんな場所に出しちゃうと、そこには宛名人がいませんでしたという付箋が貼ってある手紙、不在通知が戻ってくる。その付箋を集めるために出したんです。そうすると自分がない気持ちになる。この人はいません、いませんというのがどおと来て、俺いないんだ……っていう気持ちになるんですね。（場内笑）

それは朔太郎は病気ですね。自分の印象では、朔太郎は

目の人だと思います。初版本のこだわりを見ればわかる。朔太郎の詩集を見たとき、詩集は初版を読むべきだと思います。題がどこから始まるか、活字の大きさ、題は本文の文字列の表現よりもどのくらい大きな活字を使うか、ページ、ノンブルはどこに振るか、というのまで全部違うんですよ。あれはもう決定的ですね。ページの上とか、ずっと下とか、変なところにノンブルを振っているし。そういう意味では視覚の人ですね。だからイラストレーションみたいなものも何種類も書いているわけじゃないですか。この二階の常設展示室にあるけれど、机や何かに草花のような模様が付いています。あれも本人がデザインしているわけですね。ああいう視覚に対するこだわりっていうのは絶対あったと思うんですね。それは病気というかわからないけれども、一種の病気だったと思います。

安 先ほど私は触覚性を強調しましたが、実は朔太郎も乱歩も視覚と触覚とが対立せず、「手ざわり感のある視覚」になっていますよね。本当にユニークな二人の特徴だと思います。

あとは、いかがでしょう。

質問者B 今回のパノラマ・ジオラマ・グロテスク展、館長は

二部構成で十八禁にしたかったとおっしゃったんですが、ここの三階に展示している丸尾さんの『パノラマ島綺譚』なんか、かなりエロいんですね。（場内笑）拡大しているから、陰毛なんかかなり克明になっちゃっているんですが、全く物足りないんでしょうか。

萩原 あれでね、相当控えめにしているんですよ。あそこに展示できないところもずいぶんあって、本当は丸尾さんはそっちなんですよね。だから非常に残念ですけども、（場内笑）いずれ機会があつたら本当の丸尾さんを見ていただければと思います。もう見たくないという感じになるかもしれないませんが（笑）。やっぱり、モラルの海を航海する江戸川乱歩のようにね。

平井 インモラルですね。

萩原 インモラル（笑）。

安 インモラルといつても乱歩はどこか表現に独特の上品さがありますよね。

平井 そう取っていただけるとありがたいんですけども。さつき館長と、二部構成でやつたら、大入り満員間違いないで、新記録樹立だったと話してたんですけどね。

萩原 そういことです。

平井 そういう危ない世界というのにみんな懂れるし、覗きと

いうか、見てはならないものを見たいという欲望は誰にでもあると思うので、ぜひ第二章をお願いしたいと思います（笑）。

萩原 ちょうど今日、草野心平記念文学館と鎌倉文学館の方がいらしていますが、今度はそちらの方でもっと強烈なやつを企画してほしいですね（笑）。何しろ草野心平記念文学館は、行かれた方がいるかどうかかわからないですけども、文学館の中に飲み屋が再現されているんです。（場内笑）あれはちよつと感動しますよね。

安 「火の車」という、草野心平がやっていた半分屋台みたいな感じのお店ですね。そのたいへん見事な再現があります。

好きだった食べ物

質問者C つまらない質問なんですけど、生前、萩原先生と江戸川先生が好んで食べていた食べ物は何がありますか。

平井 食べ物質問は難しいですね。実はついこの間、『作家のお菓子』という本が平凡社から出て、その取材があつた時に本当に困ったんです。

特に萩原先生と会った時期というのは、私が生まれる二十年前くらい前ですから、その頃の食べ物ですと何ともわか

らないですね。基本的に私の祖父は甘い物好きで、朔太郎先生は酒飲みです。さつき引用していただいたところでも、

朔太郎さんは日本酒をチビチビやっている。乱歩はそれに全く参加できなかった。戦後、さつきいろいろおっしゃっていたいただいた後進を育てるとか編集者と付き合うとかいう時に、少しは酒が飲めるようになったんですが、それでも非常に弱かったはずですよ。だから、食べ物の好みについては、接点がなかったと思うんですね。ほかの趣味は全部合っていたけれども、そこだけ合わなかったということを書き残していますから、それだけが相容れなかったんじゃないかな。酒飲みと甘いものの好きは相容れないですから。うちの祖父はね、氷小豆とかが好きなんです。まあ本当の酒飲みは汁粉でもって酒を飲まないといけないらしいですけども、萩原先生がそこまで行っていたかどうかかわからないですが(笑)。なんだか答えになっていないですけどね。

萩原 私もよくわからないな。母親から、カラスミとかいわゆる飲む時のつまみが好きだったというのは聞いていますけれどね。ぼくも生まれた時には、祖父はもう亡くなっていましたので、よくわからないですね。

栗原 朔太郎自身はアンケートか何かで、若い頃は洋食ばかり食べていたと答えていますね。

安 若い頃は洋食で、肉なら何でも好きだったと、そう答えているアンケートが残っています。

平井 肉はね、うちの祖父もけっこう食べていましたよ。父から聞いた話だと、ビフテキと言わずにビステキと言っていたそうですね。

栗原 ああ、ステーキだからですか。

平井 いや、なまっていたんでしょうね。ビフテキと言えなかったんです。

栗原 若い推理小説家の卵たちが、「おいちよつと栄養付けに行こう」と言つて、乱歩先生を訪問して御馳走になるとか、そんな話が残っていますね。でも、乱歩自身は食べ物にはそんなにこだわっていなかったんでしょうか。

平井 そうですね。そんなに食にこだわる人ではなくて、少なくとも家ではあまりこだわっていなかったですね。

栗原 『萩原朔太郎 晩年の光芒』という本に出てくるエピソードなんです、朔太郎の二番目の奥さんの弟で大谷正雄という詩人が、朔太郎に付き合っているところに行き飲みに行っていたんですね。軽井沢に行った時に、避暑の間だけ神戸の有名な中華料理店のシェフが来てお店を出していた。朔太郎がそのポテトチップスを実にうまいと言つて食べて、じゃがいもを揚げただけの単純な料理を、これだ

けのものなのになぜこんなにうまいんだろうと言ったという話が、とても印象に残っています。朔太郎もそれほど食通ではなかったと思うんですけども。

安

朔太郎は、「酒と女と歌を知らない男は一生馬鹿だと、マルチンルーテル僧正が言ってる」けれど、自分は酒を飲むので、かろうじて一生馬鹿からは救われてるのかな、と書いています。二人目の奥さんの実家が、福島の造り酒屋だったというのもあったと思いますが、晩年は本当にお酒を飲んでいました。乱歩はまっとうですね。

孫に生まれて良かったこと、いやだったこと

質問者D 一つお伺いしたいんですけども、江戸川先生も萩

原先生も、どちらも文豪としてたいへんすばらしい方だとは思いますが、どちらもお孫さんに生まれて、心底良かったなあと思ったことと、心底いやだなあと思ったことがあったら聞かせていただければなあと思います。(場内笑)

平井

なかなか、名問ですね。まあさっき言ったように、芸能人と違って跡が継げるものでも全くないし、全く違う能力ですから、そういう意味で良い目にあつたことはあまりないです。ただどこに行っても、自己紹介すると、ああそう

ですかと言ってもらえるのはありがたかったなど。幸いなことに祖父は『少年探偵団』を書いていましたので、特に男の子はほぼ通過儀礼のように読んでいますから、最近でこそ知らない人も増えましたけれども、当時は知らないということはあまりなかったし、逆に言うところ、そんなに意識をしないまま、全員が知っているという状態に慣れてしまったというのがありますね。

萩原

いや、『少年探偵団』を知らないというのはちよつとないですよ。

ぼくはね、つい最近なんですけれども、うちの大学は七十で定年なんですよね。定年後に年金をもらうために、年金事務所に行ったんです。そうしたら担当の人に、「萩原朔……というのは朔太郎と関係があるんですか」と聞かれて、「孫です」と言ったら、急に親切になっちゃって、本当にありがたかった。あと、朔太郎は神田で写真を撮っているでしょう。それと同じ場所に写真を撮りに行ったら、その場所には大学のビルが建っていて、その日は受験で入れなかったんです。でも、大学の人に朔太郎の写真を見せて、この上からだと撮れるんだけれども、と言ったら、朔太郎の写真と聞いて、「わかりました」って案内してくれて、上に行つて写真を撮ることができました。受験の最中にで

すよ。これはありがたかったですね。

いやなことはいっぱいありますけれども。詩は書けないですね。書きたいんだけど、それはやっぱり、孫がこれ？　と言われたくないというね。（場内笑）もつと自由にやりたいことがいっぱいあるんだけど、そういうので書けないことはいっぱいありますね。だからぼくは雑文しか書けないんです。エッセイだけ。三流のエッセイストで私は終わりますと宣言している。小説も書けないんですよ、母親が書いているから。悔しいじゃないですか。でも、エッセイは明らかに私の方がうまい（笑）。

原作の二次使用について

質問者E お二人とも、おじい様が亡くなってもう五十年以上経ちますので、特に乱歩は今年で著作権が切れたということもあって、ネットで公開されたり二次創作も非常に増えています。アニメ化とか漫画化も増えていまして、私は乱歩のファンなので、そういったものを見るんですけれども、原作の面影もないなというものがけっこうあって、ちょっとがっかりするんです。そういった作品は、お孫さんの立場として、もしご覧になったらどういったご評価をされる

のでしょうか。

平井

二次使用についてですよ。とにかく乱歩自身はもともと、二次使用にすごく寛大だったんです。一番有名なのが『黒蜥蜴^{くろしよかげ}』で、三島由紀夫が脚本を書いているんですが、もう原作とすっかり変わっているんですね。ストーリーの順番も逆になっているところが一部あるし、たぶんもとよりもはるかにおもしろくなっていると思います（笑）。少なくとも本人は、私の作品よりも三島君の方がはるかにおもしろいと、そう言っているんですね。祖父が亡くなってからは、まあ最初は祖母がやっていたがあまりできなくて、基本的には私の父が二次使用なんかの管理をしていました。うちの父は石井輝男に二次使用の許可を出しているんですよ。あの有名な『恐怖奇形人間』。

萩原

あれはすごい映画です（笑）。

安

あれはすばらしい。

平井

あれは、ライセンスをきちんと取っていて、うちの父がちゃんと許可を出しています。たぶん祖父がやっていたことを見ているので、父も二次使用にはかなり寛大だったと思うんです。おもしろいものが生まれるんだっただけじゃないか、と言うところだと思っんですね。ですから、あまり目くじらを立てるつもりは全くないです。見る人に

とつては二次使用したもののの方がおもしろいかもかもしれないし、それはそれぞれの評価ですから何とも言えません。まあ使ってもらえるうちが花だというような、忘れられるよりはいいな、みたいな感じは持っています。著作権が去年の十二月で切れましたので、今年になってもものすごい勢いで二次使用が増えていくんです。前まではコントロールされていて、同じ時期に同じ作品は出さないようにしていたんですが、それが切れましたので、同じ作品が並行して別の雑誌で連載されているとか、そういう状態になって、これはちょっとお互い損しているんじゃないかという気も、少しはしています。

萩原 三島さんのほうまいですよ。いや見事です。三島由紀夫の作劇術は独特ですね。原作とは別物だと考えていいと思います。江戸川乱歩のほうがずっとグロですけどね。
(場内笑)

平井 まあちよつと気持ち悪いですよ。

萩原 こんな気持ち悪いのを書いてもいいのかっていうぐらいすごいですもんね。

安 朔美さんの方は？

萩原 私の祖父の方とはつくに著作権が切れているから、どうぞ自由に。何も思いません。

安

もう時間ですね。長時間にわたって、たいへん楽しいお話をありがとうございました。(場内拍手)

平井憲太郎 (ひらい けんたろう)

1950年東京都生まれ。江戸川乱歩の孫。株式会社エリエイ代表取締役。日本鉄道模型の会理事長。としまユネスコ協会代表理事。公益財団法人としま未来文化財団評議員。立教大学卒業後、株式会社エリエイに鉄道出版部門を立ち上げ、1974年より鉄道模型月刊誌「とれいん」を発刊。

萩原朔美 (はぎわら さくみ)

1946年東京都生まれ。映像作家、エッセイスト。萩原朔太郎の孫。寺山修司の天井桟敷に旗揚げから参加。1975年、「ビックリハウス」を創刊。主な著者に『赤い自転車』(1972年)、『定点観測』(1987年)、『死んだら何を書いてもいいわ』(2008年)など。多摩美術大学名誉教授。前橋文学館館長。

安 智史 (やす さとし)

1964年茨城県生まれ。立教大学文学研究科博士後期課程修了。文学研究者。著書に『萩原朔太郎というメディアーひき裂かれる近代／詩人』(2008年)など。前橋文学館特別企画展「パノラマ・ジオラマ・グロテスクー江戸川乱歩と萩原朔太郎」企画監修。愛知大学短期大学部教授。萩原朔太郎研究会幹事。

栗原飛宇馬 (くりはら ひうま)

1973年東京都生まれ。文学研究者。学位論文に「萩原朔太郎研究・思索の軌跡」(『江古田文学』59号 2005年7月)、連載「詩人と戦争」(『江古田文学』73号～82号 2010年3月～2013年3月)ほか。分担執筆書籍に『現代詩大辞典』(2008年)、『東北近代文学事典』(2013年)など。萩原朔太郎研究会幹事。